

## 「信仰者の終活」

2015年02月24日

次兄が81歳の生涯を終えた。亡くなる一週間前、二度訪ねた。穏やかな顔で、再会を喜び、話し合えた。召されるのは、まだ先だと思っていたが、病状が悪化したのであろう、思わぬ急逝であった。平安な最期で、本人も自分の人生に納得し、十分な看護をした家族も覚悟をしていた。5人兄弟の中で、最初に召され、寂しい思いは禁じ得ない。

キリスト教の月刊誌『福音と世界』の3月号は「教会と終活」という特集を組み、5名の論文を掲載している。就職するための活動を「就活」と言うように、人生の終りの死に備えるための活動を「終活」と言っている。高齢化した社会で、死が関心事になり「終活」という新しい言葉が生まれたのであろう。人は必ず死を迎える。その死に備えることは必要なことで、色々なことが考えられる。

死は忌み嫌われ、縁起が悪いとタブーとされる傾向があった。私はタブーとしたことはない。説教において、死についてしばしば語り、葬儀の時は、死を直視するような式辞を心掛けてきた。何より、キリスト教信仰は主イエスの十字架の死が核心である。死から出発した信仰で、死について思いを巡らすことは当然である。牧師として、死と向き合う機会は多く、120人くらいの死に逝く人々と関わり、お別れしてきた。家族のいない人との関わりで、プライバシーの壁に阻まれ、何もできなかった苦い経験もある。死は厳粛な出来事で、死に逝く人々から多くを教えられ、遺族の悲しみを見てきた。

キューブラー・ロス博士は『死ぬ瞬間』で死をどのように受容していくかを説き明かした。アルフォンス・デーケン神父は「死生学」と言って、死を見つめる中で生きることが捉えられると教え続けている。死に関する本は無数に出版され、関心が深まり、望ましいことである。

人は「ピンピンコロリ」で死ぬことを希望しているが、叶えられることは期待できない。そして、どのような形で死を迎えるかは誰にも分からない。だから、元気な時から「終活」が必要なのである。医療が進歩して長寿になった。まず「延命治療」と「尊厳死」、そして「臓器移植」について家族に意思表示しておく。葬儀や墓地に関して、詳しく指示しておく。死後の財産分与で争いになることが多いので、しっかり「遺言書」を残しておくことは必定である。これらの「終活」は残された者たちのために最小限、必要なことである。

自分自身の「終活」のために覚えていたいことは、次の事柄である。キリスト者は、洗礼を受け、キリストの十字架と共に罪に死に、キリストの復活の命に与り、今を生きている。その生は神の祝福の中にある。地上の生を終える死においても、神の祝福は変わることはない。死の先に、確かな命が約束されているので、死を心配したり、恐れることはない。私は葬儀の初めに、ヨブ記19章25節、26節の「わたしは知っている／わたしを贖う方は生きておられ／ついには塵の上に立たれるであろう。この皮膚が損なわれようと／この身をもって／わたしは神を仰ぎ見るであろう」を必ず読み上げる。肉を離れて、贖う神を仰ぎ見る天に帰られたと宣言したいからである。

パウロはフィリピ書1章23節、24節で「この世を去って、キリストと共にいたいと熱望して」いるが、「肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です」と書いている。地上の命が自分のためだけでなく、他者のために用いられれば、どんなに幸いであろうか。死を案じるのではなく、今を懸命に生きることが即「終活」である。そして家族に信仰に生きることはどれほど大きな喜びであるかを伝えることが最も大切ではないか。